

令和 6 年度
白根北児童館年次報告書

I 令和6年度の運営総括及び来期の課題

1. 総括

今年度は GOTO 児童館の効果もあり、昨年に引き続き利用者が増えました。また、能登半島地震の影響により、西区の児童館の利用が出来なくなったことからの利用者が増えたように感じます。コロナウイルスの影響は感じられないものの、こどもを取り巻く感染症は来館に影響します。引き続き感染対策を実施しながら運営しました。

①来館時の決まり・受付方法、館内の環境整備の変更

昨年同様感染症対策として、来館したらまず予防効果の高い「石鹸での手洗い」を徹底しました。

受付方法はコロナ禍と変わらず、日ごとの来館者の情報把握を目的として南区役所健康福祉課から頂いた入館者表のデータをもとに来館者受付表を作成し、氏名、住所、電話番号、園学校名、来退館時間を記入してもらいました。小学生は住所、電話番号を記入するのが難しいので学校名を記入してもらいました。変更したことで大通小学校の児童は自分の学校名「おおどおり」の字を学び、書き順を覚えることができ、中高生は自分の住所、保護者の電話番号を覚えることができとても良かったと思います。受付時のこども達とのコミュニケーションはこども達の様子の変化の気づきに繋がります。職員の声掛けからこども達の返答はとても多く色々な近況報告や会話に繋がりが過しやすい環境になる大切な時間だと思っています。

また、環境整備として各部屋常時3か所以上の窓、ドアを開け換気しました。幼児の部屋に「遊んだもののいれ」の籠を設置し、遊んだおもちゃは籠に入れてもらいました。籠に入れられたおもちゃは職員が随時回収し、消毒してから元の場所へ戻しました。加えて各部屋利用者が居ない時に午前と午後に1回ずつ設置されている全ての遊具を消毒し換気しました。遊戯室では交代の時毎に遊具の消毒、換気時間を5分設けました。遊戯室の利用前後の手洗いを緩和したものの、不特定多数の遊具の共有から遊戯室終了後に手洗いを促しました。冷水器も共有を避けコップを持参するか紙コップを提供して水分補給をしてもらいました。SDGs の観点から子ども達には水筒を持ってくるように呼びかけました。

②SDG s チャレンジ

昨年度同様に来館時の手洗い等を促していることから、毎回ハンカチを持ってくるように声掛けしました。「ハンカチを忘れたら取りに帰る」と職員と約束する事でハンカチ持参率が高く、中高生もハンカチを持ってくるようになりました。出かける時のエチケットとして身につけてきたと思います。またハンカチを忘れたことを隠さずに職員に伝えることで困った時に大人に声を掛ける習慣が身につくように欲しいと思います。

乳幼児事業

(1) 総括

近年、乳幼児は産後休暇、育児休暇の取得後から保育園に入園する0歳から1歳の利用母数が多く、児童館より支援センターの利用が多かったように思いますが、昨年に続き3歳まで入園しないこどもの利用があり、2歳児の利用が増えました。また、下の子の出産により育児休暇中の親子の利用が多く、兄弟連れの利用が増えました。

2～3歳児は身体の発達も大きく、支援センターより身体を動かせる児童館を利用することが増え、行動も活発的です。母親は下の子を抱っこしながら上の子を見守り、職員が間に入りこどもと一緒に遊びました。同じ年齢同士でおもちゃの取り合いから譲り合いへと1年を通してこども達の成長を保護者とともに見届けることができました。保護者同士も会話が生まれ顔なじみになっていき、児童館が母親達の交流の場になっていると感じます。

また、保育園帰りに児童館へ立ち寄り、夕食まで思いっきり身体を動かして過ごす親子も多く見受けられました。休日には、家族で過ごしたり、近所のグループで集まったり同世代の子どもの交流を目的に来館する親子も見受けられました。休日に来館する頻度の高い親子は小学生と知り合いになり、一緒に遊び親子共に楽しく過ごす場になっています。また公園でも会ったと話を聴き、近所の大人が見守る関係もでき、安心できる地域に繋がっていると感じます。

① いちごタイム（作って遊ぼう・農園の活動）

毎週木曜日の10時30分から概ね20分程度、乳幼児の定例イベントとして、『いちごタイム』を開催しました。『いちごタイム』は主に入園前の乳幼児親子対象としていますが、夏休みや春休み中は保育園児や幼稚園児の参加もありました。内容は主に手遊び、親子触れ合い遊び、絵本読み聞かせ、季節にちなんだ遊び等を提供してきました。参加組数は平均8～12組で、月齢は1・2歳児が多かったです。また、第1木曜日(不定月)には『いちごいちば(サイズアウト交換会)』、第3木曜日には『いちごみるくタイム(ママたちの交流会)』を取り入れました。

『いちごいちば』は不要になった衣類やおもちゃを持ちより、欲しい方に譲るサイズアウト交換会です。「使った方の顔が見える。安心して使える。」ことと「使い方等のアドバイスをいただき交流を図る。」ことを目的に行いました。「これは何ですか?」「便利～使ってみたい」「こういうの欲しかったけど買うまでは…」と思っていたからありがたい」等会話が生まれました。また、普段は仕事で平日に来館できない方のためにあおぞら市場で0円バザーを行うと保育園の着替え等で必要な衣類が人気でとても好評でした。

『いちごみるくタイム』はママ同士が児童館ならではの【遊び】のカードゲームやバドミントン・卓球等を通してコミュニケーションを取りやすくし、その後のママ同士の繋がりを深めるために始めた事業です。0歳のねんね赤ちゃんから1歳のよちよち赤ちゃんを持つ母親を対象に企画しましたが、2歳児の母親も「参加したい」と言う声を聞き、その後どなたでも参加できるようにすると、毎回4～6名が集まり、2・3種類のゲームで盛り上がっています。ゲームは得意不得意が分かり、見た目と違う姿が見られ、母親達の打ち解ける速さが違うと感じています。また母親同士で認めあう姿が見られ、母親の自己肯定感の向上にも繋がっていると感じられます。中には「面白いボードゲームを紹介したい」と母親が持参して参加者に遊び方を教えながら楽しむ姿が見られたり、友達を誘いあい大勢でカードゲームを楽しんだ回もありました。その傍らでこども達は職員と遊んで過ごしています。時折母親の下へいき懷で落ち着くとまた遊びに出てきます。こどもも母親も楽しく過ごせる環境になっていると感じます。

その他、農園の活動ではじゃがいもやさつまいもの苗を植えたり、畑の水やりや収穫など土と親しむ機会を設け、収穫時にはお土産として持ち帰ってもらいました。

② 季節イベント

定例の乳幼児イベントの他に季節に合ったイベントも実施しました。10月ハロウィン、12月クリスマス会、2月豆まき会とそれぞれの季節を感じながら、月齢の低い乳幼児でも無理なく参加できるイベントを実施しました。定員制にすると予約はあつという間に埋まり、キャンセル待ちがでる人気のイベントです。内容は例年人気の、職員が寸劇をして母親達にも

見て楽しんでもらえる取り組みと「写真スポット」を設けました。各イベントで「写真スポット」などのブースを設けるととても人気で、1人から友達同士、母親と一緒になど様々な写真撮影を楽しんでいました。12月のクリスマス会では、大通郵便局局長にサンタクロースになってもらい、子ども達にプレゼントを手渡ししてもらいました。子どもと母親は大喜びでした。2月の豆まき会では感染症対策として豆まき体験は実施せず、雰囲気を楽しんでもらいましたが、母親からは「豆まき体験をさせたかった」と残念がる声も聞かれ今年は豆まき体験も実施できました。今後も、その都度利用者の声を聞きながらイベントの内容を柔軟に変えていきたいと思ひます。

③ パパサロン

子育てオーエンジャー☆みなみと共催で行った『パパサロン』は南区で初めてのパパ向けの連続企画です。近年パパの利用も多く、パパの育児参加が多く感じられていますが、イベントへの参加はママが多い事からパパの参加は控えめでした。パパ同士も関わり繋がる事で育児ストレスを解消してほしいと始めた企画です。同学年を持つパパが回を重ねることで関わり繋がりが出きるように企画していましたが、前年に参加されていた家族の継続的な参加が断ち切られることから今年は参加できる年齢幅を広く計画しました。今は夫婦で子育てを共有している家族が多く、「ママも参加したい」「ママと一緒に参加する」という声もあり、パパが1歩踏み出すことを目的にママの参加もOKにしており夫婦参加が多いです。

また、今年も地域のパパが提供するパパサロンが実現できました。地域の歯科医師からの「予防歯科講座」ジュニアスポーツ指導員からの「運動遊び」と、どちらも子育て中の父親としての共感も得られ質問等が行きかいとても良い会になりました。

④ 年長児交流会

幼稚園・保育園・こども園・小学校の連携を深める意向から、昨年に引き続き年長児交流会を実施しました。ガ德里ュスいぶき保育園・大通保育園と大通小学校に入学する寺地保育園の園児が参加し、ゲームを通して交流しました。こども同士の関わりを深めるために考えたゲーム4種で盛り上がり、中でも「〇×クイズ」では各園のクイズを出題すると「そっちじゃないよ。こっちだよ。」とお互いを呼び合う姿がとても素敵でした。最後に児童館に来館した小学生に書いてもらったメッセージ付きの「児童館マスターメダル」をプレゼントし、お互いに「またね～ばいばい！」とハイタッチをして小学校での再会を約束していました。その後、小学校へ入学する不安が少しでも解消できればと思ひます。

（2）来期の目標・課題

昨年同様、支援センターからの紹介や、口コミ、SNS等での来館者が定着してきたと感じます。友達同士での来館や、紹介してもらっての来館は初来館のハードルが低く、来館時の緊張感が少なく、すぐに職員と打ち明け、会話が弾みます。こども達も「〇〇ちゃん（職員の名前）と遊ぶ」と職員を指名。指名されない職員はいない程こども達はお気に入りの職員と遊び、違う職員と遊ぶと次回その職員とも遊べることを楽しみにしています。また、平日、休日関係なく利用者が平均的に来館し顔見知りになると自然と交流している姿が見られました。特に父親は来館しても交流まではなにくかったですが、近年は父親同士の交流の場も見られました。また、BP講座開催会場の一つになっており、BP講座開催後児童館のイベントにグループで参加される姿が多くみら

れました。課題としては近年、夫婦で子育てが定着していることから夫婦での孤立やワンオペとの格差を目の当たりにします。交流の場や機会が失われた期間からコミュニティ不足の脱却はすぐに解決できるものではないと感じています。その為、子育て等の悩み等を一人・夫婦で抱え込んだり、孤立する環境が出来てしまうと思います。来館した際に利用者と関わる事で利用者が打ち明けられる雰囲気を作り、利用者の悩みや不安に寄り添いながら、乳幼児と保護者の居場所になるように、行って良かったと思える児童館にしていきたいと思っています。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度は1年生のほとんどが学童クラブに在籍し、2年生習い事を始めた等で春先は来館が伸び悩みました。春から大通学童クラブが毎週火・木曜日に児童館利用をしました。6グループに分け毎回1グループ10名程度が来館し1時間程度遊びました。学童クラブのこども達に来ることが楽しみな児童館のこども達は、学童クラブのバスが到着すると玄関でお出迎えをして待ち構えました。コロナ前は友達と約束をして利用する子どもが多く、グループで遊ぶ姿が多く見られましたが、近年は少数で来館し、その時居る子ども達で遊ぶ姿が見られ、他学年交流が自然とできました。高学年は低学年への配慮が上手で、低学年は高学年のパワフルな姿に相乗し、楽しく過ごしていました。また昨年同様中学生や乳幼児との交流も定着しています。

常連の子どもたちが増えると、学校・学年が違っても名前を覚え、友達になっていく姿が見られ、知っているこどもが来館すると歓声が上がり玄関で出迎えている姿が印象的でした。ある程度人数が揃うとドッジボール、一輪車、鬼ごっことその時居るメンバーで遊戯室をどのように利用するか話し合い、決めている姿が見られ、やりたいことが出来るようにみんなで考えている姿も印象的でした。

① 地域の方との連携

今年度も引き続き地域の方々のご協力を頂き、沢山の活動が出来ました。小学生の父親たちを募り『と～さんず』を結成し子ども達の対戦相手をして盛り上がりました。今年は『か～さんず』も結成してほしいという母親達の声から『と～さんず・か～さんず』を結成し3名の母親と児童館OBの若者が参加しました。こども達はお父さんの投げるボールの速さに歓声を挙げ、お父さんはこども達のキャッチの上手さに歓声を挙げ、お互いにいい刺激になったと思います。南区4館合同ドッジボール大会ではその力を発揮できたのではないかと思います。また、中学生からもリクエストがあり中学生VS『と～さんず』で勝負を行いました。結果はひき分けで延長戦へ。それでも引き分け次回へ繰り越しとなりました。その他、8月には『地震防災』と『親子クッキング』を行いました。地域の防災士に『地震防災』の絵本を通して「こんな時どうする？」をクイズ形式で教わりました。「1人で家にいた時」「学校の帰り道」「自転車に乗っている時」等沢山の可能性からどうしたら良いかをみんなで考えました。核家族共働きの現在、子どもが1人で過ごしている時間が多く、緊急時に対応できる心構えは大切だと感じました。訓練や体験がいざという時に活かされるようにまた機会を設けたいと思います。『親子クッキング』では大通地域生活センターにて食生活推進委員による栄養バランスを考えた食事を作り、塩分濃度を測りながら調理しました。『うちの味噌汁はもっと味噌入れている』『出汁や具材で調節できるね』等親子で味の違いを感じながらクッキングを楽しみました。

児童館OBやOGの活躍もありました。児童館OGの県立大学生が仲間を募り、幼児から低学

年向けに七夕とクリスマスコンサートを実施。男子学生を含む学生がピアノの生演奏で素敵な歌声を聞かせてくれ、こどもと保護者、幼児と小学生、こどもときたもんクラブの皆さんが相互に関わり一体となるよう手遊びやダンスで盛り上げてくれました。コンサート後には小学生とゲームやドッジボールで異年齢交流を深めました。学生からも「良い経験になった。」「こどもとの交流が楽しかった。」との声をもらいました。2月の恒例豆まき会では怖い赤鬼、青鬼が登場。児童館OBが鬼に扮し幼児を抱っこし保護者は写真に収めたり、小学生を追いかけたりと活躍してくれました。その後も児童館OBは農園作業も手伝い毎月ボランティアをしています。このように地域の方々と共にこども達が様々な体験の出来る場になっていると思います。

② 移動児童館昨年に引き続き「児童館利用促進事業 GO TO 児童館」として根岸小学校地域、大鷲小学校地域に出向きました。根岸地域では、夏休みに週1回計4回根岸地域生活センターで「ねぎしっ子児童館」を実施。小学6年生を中心に毎回8名程度集まりました。身体を動かすドッジビーや大玉ドッジ、レクリエーション、カプラ等毎回3～4種類の遊びを行いました。親戚のこどもを連れて、中学生の兄が小学生を連れて等皆勤賞の生徒が多かったです。中学生がお手伝いに来てくれたことにより、遊びも楽しくなりました。地域柄学年問わず仲が良く、みんなで楽しんでいる姿が印象的でした。最終日にどの遊びが楽しかった？と聞くと「ドッジビー」「今度は工作もしたい」とリクエストも出ました。また、根岸小学校の振替休日に根岸ひまわりクラブにレクリエーションとカプラを提供しました。大鷲地域では、大郷地域生活センターで大鷲小学校の生徒2～6年生に向けて月に2回、定員各10名で「おりがみDays」を提供しました。昨年度に続き、壁掛けカレンダーに作品を貼り飾れるようにしました。その月の季節に合わせた折り紙を折り、自由に貼ってもらう事により、おりがみだけでなく絵を描いたりと楽しんでいる様子がみられました。大鷲小学校の低学年は大郷地域生活センターで運営している学童クラブに所属している児童が多く、学校帰りにそのまま参加でき、学童クラブに所属していない児童も自分で来所したり、送迎してもらい参加していました。また、大鷲小学校でも昼休みにおりがみの時間を月に2回6か月実施しました。今年はみんなで折ったおりがみが壁面のひとつの大作になるように文化祭に向けて折り続けました。最終日には「へえ～こうなるんだ！」と大作になって感動していました。毎回参加するこどもからは手先の上達、一人で集中して遊ぶ、順番を守る等の変化が見られました。その他学年行事や学童クラブに出向き、レクリエーション等行いました。

③ 農園クラブ

設立当初の「子どもたちに土に触れて欲しい」という願いから設立された農園を児童館運営の中心に位置づけ、子どもから子育て世代、多世代間の交流を促し地域の繋がりを深めること、白根北部の各地域の農業体験の格差を埋め郷土愛をはぐくむことを目標に、白根北児童館の農園活動を地域と子どもが関わる拠点活動として農園活動を主とした「小学生クラブ」を立ち上げました。月に1回計6か月間、農園で苗植えから収穫、収穫した野菜の提供を一貫して行います。今年は大鷲小学校・大通小学校・有明台小学校の3地域の小学校から15名の参加者が集まりました。

農園活動には、地域のボランティアグループ「きたもんクラブ」に協力を頂き子どもたちと一緒に活動してもらいました。また農園活動を発展させるために、根岸地域前コミュニティー協議会会長の紹介で、鷲巻地域の農家から約100坪の畑を貸して頂けることになりました。

農地拡大により手作業ではかなりの労力が必要になります。そこで、ワーカーズコープの機能である、仕事おこしサポート体制「社会連帯」を活用し、耕耘機の購入や農作業道具の補充をしました。

小学生クラブを「きたっこわくわくクラブ」と名付け、じゃがいも・さつまいも・ミニトマト・ズッキーニ・ししとう・ピーマン・ゴーヤ・枝豆等、苗植え・草取り・収穫を中心に活動を行いました。野菜を地域の方へ提供する「あおぞら市場」を夏と秋に開催。その際に小学生クラブのメンバーは受付や売り役、来年度の苗代の募金をきたもんクラブの方々と行いました。夏は10種類の夏野菜が並び、秋はさつまいもとさといもを用意しました。クラブのメンバーはあおぞら市場だけでなく、季節のイベントの司会進行や受付等様々な場面で活躍してくれました。参加したメンバーからは、「楽しかった」「来年もやりたい」という声も聞かれ、6年生で卒業するメンバーもいましたがほとんどが次年度に申し込み、来年度も継続するメンバーが多いです。きたもんクラブの皆さんからも、ボランティアメンバーが集う喜びの声を聞かせて頂きました。

また区民生活課との協力でダンボールコンポストを実施し、アルビレックスと共同で『アグリレックス』として6月にアルビレックスホームでダンボールコンポスト作りを一緒にを行い、その追肥を用いて児童館の苗植えを行い収穫しました。収穫した野菜は地域こども食堂「もぐ」に提供しました。アルビレックスの谷口選手も2回来館し、児童館のこども達と一緒に苗植えや収穫を楽しみました。こども達はプロサッカー選手と一緒に交流でき、目を輝かせていました。とても貴重な経験が出来たと思います。

今年も、クラブに参加しなかった子どもたちも農園活動に興味を持ち「お手伝いスタンプカード」を作成しました。水やりでスタンプ1個、バケツ一杯の草取りでスタンプ2個、10個貯まると野菜引換券になる仕組みです。お手伝いが見える化したことにより、子どもたちも「大変・めんどくさい」から「楽しい」に変わりました。そしてお手伝いしたことで感謝されることにより喜びを感じることができました。その後も冬季の除雪作業までお手伝いが続きました。

これらの活動を通して野菜の生育を見守る楽しさ、収穫する喜び、野菜を提供し感謝される喜びを体験し、地域の特産である果物や野菜に興味を持ってもらい食育と郷土愛に繋げていきたいと思っています。

④ 4館共同ドッジボール大会

南区の児童館4館でドッジボールが人気だったことから2年目の『南区4館合同ドッジボール大会』を実施しました。各館で低学年(1～3年)、高学年(4～6年)のチームを作り、白根児童センターで対戦しました。この企画を聞いてからこども達のドッジボールに対する熱意が変わりました。『とーさんず』の結成もあったことから『とーさんず』への闘志を燃やし、こども達のチーム力が高くなったと思います。夏休み前から6年生が中心となり中学生と共に作戦を練ったり、互いに誘い合いながら参加意欲が高まってきました。9月の大会では中学生もコーチとして参加し各チームを考察しこども達で作戦を練りました。今年は高学年・低学年同時に試合をスタートした事から互いの試合の時間には応援も出来ました。結果は見事ダブル優勝！賞状とトロフィーをもらった代表に感想を求めると「高学年のみんなが応援してくれたから勝てました」とチームが一体となった喜びをかみしめました。送迎された保護者の方も一緒に応援し、保護者の方にもアンケートを取ると「こんなに盛り上がると思わなかった」「頭脳プレーがすごかった」「見ているこっちも熱くなった」と喜びの声を伺いました。保護者の応援・こども達のチームの応援が勝敗の決め手は応援だったと実感しました。その後、11月のあおぞら市場でドッジボール大会を実施。実施前に表彰式を行いました。保護者や地域の皆さんの前で表彰され活躍を称えました。みんなで勝ち取ったトロフィーは児童館に飾ってあります。その後も思い出話に花を咲かせ、既に来年度の闘志も燃やしています。

子ども達の「社会性」「主体性」等「育む力」を感じる大きなイベントでした。

（２）来期の課題・目標

小学生の児童館利用は距離、習い事、学童クラブの在籍、友人関係等様々な状況に左右されます。地域のこども達にとっては遊び場の一つに児童館は定着していると思います。普段の遊びでふと立ち寄るこども達もいれば、イベント目的のこども達もあり、イベントによっても来館するメンバーも違います。多様な対策が整うことでこども達の来館する意欲に繋がり、その後の関わりや支援に繋がると思います。その為に様々な視点からこども達の興味を持つイベントや関わりを大切に、こども達一人一人が主体的に活動できる環境とこども同士の関わりを深め体験できる環境を整えていきたいと思っています。こどもの「意見聴取・意見反映・フィードバック」を大切にしていきます。

3. 中学生・高校生事業

（１）総括

中高生の利用時期は暖かい時期が多く、部活動の休みの日や週末にグループ毎で来館していました。昨年小学6年生の利用が多かったことから春休みには新1年生が多く来館し、遊戯室でバドミントンや3オン3コートでバスケットボールを楽しんでいました。入学式には真新しい制服を見せに来てくれるこどももあり、職員も喜びを感じました。ゴールデンウィーク頃から新しい友達も増え移動児童館で顔を合わせていた大鷲・根岸地域のこども達が多く利用しました。昨年に引き続き2・3年生は定期的に来館し、遊戯室でバドミントンやドッジボールで身体を動かし、ボードゲームに夢中になっていました。小学生とのドッジボールも男女問わず参加し力加減のコントロールも培っています。中高生はハンカチの持参率がとても低いですが、毎回の来館時の職員とのやり取りでハンカチ持参率は高くなります。玄関先でハンカチを得意げに職員に見せる姿や「あ！ハンカチ忘れた」と言って一度帰宅する姿等、自主的な行動に感動します。毎年恒例で農園の手伝いをお願いすると、必ず手伝ってくれてとても頼もしい限りです。その後も農園作業をしている職員を見つけると、「何しているの？手伝うよ」と駆けつけてくれました。

6月の白根北中学校職場体験では、乳幼児と1組ずつペアになり幼児と一緒に遊びました。「何がしたいかわからない」「どうしていいか戸惑う」等言いながらも母親から教えて頂きながら幼児を楽しませてくれました。その後も来館した際には積極的に幼児に声をかけ遊んでいました。また、消防士をお呼びし救急救命講習も実施。南区区ビジョンまちづくり計画にある「中高生が社会の一員として活躍するための力を育むため、防災知識及び防災面における自助・共助・公助について学習体験する機会を提供する」に添って理解を深めました。

秋の「あおぞら市場」で「よさこいを披露してほしい」とお願すると中学3年英を中心に6名が参加し「しろきたよさこい」を披露、中学1年生は自主的に「越後南区大風のまち」を披露し、「あおぞら市場」のオープニングを務めてくれました。

中学生にもドッジボールは人気で『と～さんず・か～さんず』とのドッジボール大会も中学生からリクエストがあり中学生チームを結成。対戦を挑みました。いつもは華麗なパス回しも『と～さんず』にカットされ、思うようにゲームが進まないもどかしさに「もう1回やりたい！」「今度はいつ？」と闘志を燃やしていました。また3月には白根第一中学校の生徒4名が3オン3コートでバスケットボールを目的に来館すると来館していた白根北中学校の生徒は「あの人たちどこの人？」「よしゲームしようぜ！」と職員と共に声をかけに行き「バスケ交流会」が実現しました。はじめの挨拶から握手、ハグにまで進展。ゲーム中も声を掛け合いながら楽しいゲームにな

りました。最終的には名前を呼び合う中になり、翌日には「またやりたい白根児童センターに声かけて」とリクエストがありました。

高校生は部活やアルバイト等で来館は少ないですが、来館した際には職員に近況報告をしてくれます。3年ぶりに来館した高校生は「小学生と遊んで、俺も小学生の頃沢山わがまま言ったなあと感じました。あの時は大変お世話になりました。」と振り返っていました。「自分のことを分かってくれるのは親と〇〇(職員)だけだから」と言いながらも自分を客観的に見て自分の出来ることを模索している姿に成長を感じました。これからも「職員に話したい」と来館できる場になればと思います。

イベントでは、普段忙しくて来館自体が難しい中高生の現状を考慮して、日にちを指定するのではなく月間や週間で行いました。期間が長い分、平日から休日までより多くの中高生がイベントに参加することができました。

今後も、中高生にとって居心地のよい『居場所』となるようにイベントや普段の関わりを大切にしていきたいと思います。

(2) 来期の課題・目標

中学生・高校生の『居場所』作り

昨年掲げた目標に今年度は成果が見られたと思います。中高生の利用は昨年より1,000人増え、中高生にとっても利用しやすい場になっているのではないかと思います。今年度引き続き継続していきたいと思います。

中高生の年代になると、学校の授業や部活動、習い事等でそもそも児童館に足を運ぶことが難しくなります。忙しさに加えて人間関係や進路のことなど悩みが多くなる時期に、児童館が息抜きするための1つの『居場所』になればと考えています。中学生はどの学年も小学生の時から来館していた子ども達で、一時来館しなくなっていた子ども達が再度来館し、成長した姿を職員に気付いてもらい、職員と沢山話をして交流している姿を見ると、彼らにとって安心できる職員がいる自分の『居場所』の一つとして感じ取ってもらえているのだと思います。また中学生になるとまだ児童館の存在を知らない、知っているけど行ったことない子ども達と一緒に来館し新たな利用者も増えています。

中高生の来館は、小学生時代の関わり、更には乳幼児時代の関わりが反映されると感じました。来館した時には職員が密に関わり、信頼関係を築くと同時に中学校等にポスターを掲示して周知していきたいです。

来年度は部活動の地域移行の節目の年度により、1年生は部活動がなく、2,3年生は部活動がある状態です。部活によっては継続が難しい等環境の変化に戸惑い悩んでいます。

部活動に代わる居場所や活動をコーディネートし、日々の忙しさなどからストレスフルな環境で過ごしている中高生の心の拠り所となるように『居場所』作りをしていきたいと考えております。